

https://prowriters.jp/grammar/postpositional_particle

わかりやすい文章を書くための国語文法 助詞

助詞とは

助詞(じょし)の活用表、種類、助動詞との見分け方について解説

日本語の助詞とは何か、助詞の使い方・活用の種類・覚え方について解説します。助詞の一覧・例文や意味もあわせてご紹介します。文法で基本的な格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞という助詞の分類や見分け方についてもわかりやすくお伝えします。



pro writers 編集部

最終更新日：2020年11月05日

参考文献：文部科学省中学校学習指導要領など（末尾に記載）

助詞は言葉に意味を肉付けする語です。「が」「も」「の」「を」などが助詞です。この記事では、格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞などの助詞の見分け方や使い方について、例を交えてわかりやすく解説します。

この記事の目次

- [助詞とは](#)
- [助詞の例文](#)
- [助詞の特徴・働き](#)
- [助詞の使い方・種類の一覧](#)
- [\(1\) 格助詞](#)
- [\(2\) 接続助詞](#)
- [\(3\) 副助詞](#)
- [\(4\) 終助詞](#)
- [接続詞と接続助詞の違い](#)
- [助詞と助動詞の違い](#)
- [まぎらわしい助詞](#)
- [さらに詳しく](#)

助詞とは

助詞は、**言葉に意味を肉付けする語**です。「～を」や「～が」など、名詞に接続して言葉の意味を補足語や主語にしたり、「～と」のように語と語をつなげたりする言葉を、まとめて助詞といいます。

例えば次の例では、() の中に入る語が一語違うだけで、読み手の受け止め方が全く変わってきます。

太郎()花子()怒る。

「太郎と花子が怒る、太郎が花子を怒る、太郎を花子が怒る」など、助詞が入れ変わるだけで、太郎と花子がどういう関係で、書き手がどういうことを言いたいかが全く変わってきます。

す。

言葉と言葉をつなぎ、微妙な意味を肉付けする重要な役割を果たすのが助詞です。

助詞の例文

助詞の例としては、次のようなものがあります。

- 花**が**咲いた。(主語であることを示す助詞「が」)
- 高い**から**買わない。(理由をあらわす助詞「から」)
- 兄ちゃんをいじめる**な**。(禁止をあらわす助詞「な」)

助詞の特徴・働き

助詞の特徴は、**付属語であり、活用がない**ことが挙げられます。この2つは大切なポイントとなりますので覚えておきましょう。

特徴(1) 助詞は付属語である

助詞は、「が」「の」など、それだけでは意味が分からない語です。他の語に付属するため付属語と呼ばれます。

例えば「動く(動詞)」「野菜(名詞)」などの自立語とは違い、助詞1語だけでは意味がわかりません。自立語(動詞・名詞・形容詞・形容動詞など)の後ろにくっついている1文字から3文字の付属語の中で、活用がないものが助詞です。

特徴(2) 活用がない

助詞には活用がありません。活用がないとは、「～ます・～ました」というように形が変わらないことをいいます。

助詞の特徴

- 付属語(それだけで意味が分からない)
- 活用がない(後ろにくる語によって形が変わらない)

助詞の使い方・種類の一覧

助詞は、**格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞**の4つに分類されます。それぞれの種類の助詞の一覧や使い方とともに解説します。

(1) 格助詞

格助詞とは

格助詞は、おもに**体言（名詞など）**のうしろについて、その体言が、文中の他の言葉に対してどのような**関係か**を示す働きをする助詞です。

とりわけ格助詞は文章の中で重要な意味を持ちます。日本語は「述語」と「格助詞」で文章全体の意味が表されます。例えば「〇〇で〇〇が〇〇を食べた」という文章は、格助詞と述語だけの文章ですが、これだけでも、どこかで誰かが何かを食べたのだろうという意味が伝わります。

格助詞の種類

「が・を・に・へ・と・より・から・で・や・の」の10種類

格助詞の覚え方は、「鬼が戸より出、空の部屋(ヲ/ニ/ガ/ト/ヨリ/デ、カラ/ノ/へ/ヤ)」という語呂合わせで覚えます。

格助詞の使い方・働き

格助詞には**主語・連体修飾語・連用修飾語・並立**をあらわす4つの使い方があります。

1. 主語であることを示す働きをする「が」「の」

助詞「が」「の」をつけることで、主語であることを示します。「～の」も主語をあらわすことがあります。

- ひまわり**が**咲く。
- ひまわり**の**咲く季節だ。

2. 連体修飾語であることを示す「の」

助詞「の」をつけることで、連体修飾語であることを示します。連体修飾語は体言（名詞）を修飾する語です。

- 子供の運動会。助詞「の」が、すぐ後ろの体言「運動会」を修飾しています。

3. 連用修飾語であることを示す「を」「に」「へ」「より」「で」

助詞「を」「に」「へ」「より」「で」をつけることで、連用修飾語であることを示します。連用修飾語は、用言（動詞、形容詞、形容動詞）を修飾する語です。

- ラーメンを食べる。
- 将来パイロットになる。助詞「を」「に」がすぐ後ろの用言「食べる・なる」を修飾しています。

4. 並立の関係であることを示す「と」「や」「の」

助詞「と」「や」などをつけることで、並立の関係であることを示します。

- 浴衣と下駄とを買う。
- 行くの、行かないの。

補足：「の」は格助詞としない場合もある

学校で習う文法では「の」を入れて10種類ですが、学術的な日本語文法では「の」は除外されて9種類となります。これは、学校文法では「の」は主語を作る格助詞としていますが、日本語文法では、この働きを例外としているためです。

たとえば「雪の降る日に出かけた = 雪が降る日に出かけた。」の文では、学校文法の解釈では、「の」は「が」に意味を置き換えられるため、主語をつくる助詞となりますが、一方、日本語文法の解釈では、これは「雪の日」という意味になるため、「の」の例外的な用法とされています。

複合格助詞

「について」「によって」などの複数の「語」がまとまって格助詞に相当する機能をつくることがあります。このような語を複合格助詞と呼びます。

「のおかげで」「にかけて」「をはじめ」「に際して」などの言葉も複合格助詞です。

(2) 接続助詞

接続助詞とは

接続助詞は動詞などの用言や、「～ます」などの助動詞の後ろについて、前後の文節を接続する助詞です。

接続助詞の例

接続助詞は次の言葉です。

「ながら、ば、と、ても、が/けれど/けれども、のに、ものの、ところで、ので、から、し、たり、て」

接続助詞の働き・使い方

接続助詞には、順接・逆説・単純接続の3つの働きがあります。

1. 順接の働き

順接の働きをする接続助詞は、後ろに当然の結果が続きます。

「ので、から、ば、と、て（で）」

- 雨が降ればビアガーデンは中止だ。
- 走ったので間に合った。

2. 逆説の働き

逆説の働きをする接続助詞は、後ろに予想外の結果が続きます。

「が、ても、ところで、のに、ものの、ながら、けれど」

- どんなに食べても太らない。
- 寒いのに汗をかいている。

3. 単純接続・並立の働き

単純接続・並立の働きをする接続助詞は、**単純に接続**します。

「が、し、ながら、たり、て、で」

- これから会議がありますが、参加しますか。
- 食べながら考える。

(3) 副助詞

副助詞とは

副助詞とは、いろいろな語に意味を添える働きがある助詞です。副助詞がつくことで文に意味が加わります。

副助詞の例

副助詞の例としては次のようなものがあげられます。

は、も、こそ、さえ、でも、ばかり、など、か

副助詞の働き・使い方

副助詞は 20 以上の種類があり、意味を添えます。

ここでは代表的な「は、こそ、も、さえ」の微妙な意味の違いについて解説します。

副助詞「は」

副助詞の「は」には3つの意味があります。

種類 1. 他と区別する意味を持ちます。たとえば、「高橋部長は素敵だ」とすることで、高橋部長を他の人と区別し、暗に他の人はかっこよくないということをあらわしています。それに対して「高橋部長がかっこいい」とすると、他と区別するという意味はないので、他の人

はかっこよくないというニュアンスはなくなります。なお、特に区別する意図がない場合は、

「は」ではなく「が」などを使うように心がけるとよいでしょう。

種類 2. 強調の意味を持ちます。たとえば「彼がやったと思えない」を「彼がやったとは思えない」とすることで、文を強調することができます。

種類 3. 繰り返しの意味を持ちます。たとえば「おもちゃ箱をひっくり返して戻している」を「おもちゃ箱をひっくり返しては戻している」とすることで、何度もという意味を付け加えています。

副助詞「こそ」

副助詞の「こそ」には指定強調の意味があります。「こそ」を使うことで、とても強い意思をあらわすことができます。

「山田くんがスターにふさわしい」を「山田くんこそスターにふさわしい」とすることにより、たくさんの人がいる中で山田くんを指定して強調しています。

副助詞「も」

副助詞の「も」には、同類・強調・並立の意味があります。

同類の意味。「なわとびが得意だ」を「なわとびも得意だ」とすることでなわとび以外のものも得意であるという意味を付け加えています。

強調の意味。「銀行で振込をするのに1時間かかった」を「銀行で振込をするのに1時間もかかった」とすることで、強調の意味を加えています。

並立の意味。「父も母も」とすることで、父と母が同じ並立だという意味を加えています。

副助詞「さえ」

副助詞「さえ」には、類推の意味、限定（強調）、添加の意味があります。

類推させる意味。「触れることができない」を「触れることさえできない」とすることで、

手を繋ぐことももちろんできないと、読者に推測させる意味を持ちます。

限定(強調)の意味。「君がいればいい」を「君さえいればいい」とすることで、限定して絞り込む意味を付け加えています。英語では only の意味です。

添加(付け加え)の意味。「ひらがなが書けない」を「ひらがなさえ書けない」とすることで、漢字が書けないことに付け加えて(プラスして)ひらがなも書けないという意味を付け加えています。

(4) 終助詞

終助詞とは

終助詞とは文末について、さまざまな意味を添える助詞です。終助詞がつくことで文に細かなニュアンスが加わります。

終助詞の例

か、な、ね、よ、ぞ、とも、なあ、や、わ、ねえ

たとえば、「机の上をちらかすな」というように、最後に「な」を加えることで、禁止の意味を付け加えています。

終助詞の働き・使い方

1. **疑問・質問の意味。**「か、の、ね、かしら」などがあります。「明日は締め切りです」が「明日は締め切りですか」になることで、疑問の意味を加えています。
2. **反語の意味。**「三橋さんが締め切りを忘れるだろうか。」という文では、「～するだろうか、いやそんなわけがない」という意味を加えています。
3. **禁止の意味。**「書いたあとに読み返すことを忘れるな。」という文では、「書いたあとに読み返すことを忘れる」を「読み返すことを忘れるな」とすることで、禁止の意味を加えています。

4. **感動の意味**。「な、なあ、や、か、よ」などがあります。たとえば「彼女のスケートは本当に美しいなあ。」というように「美しい」を「美しいなあ」とすることで、感動の意味を付け加えています。

5. **念押しの意味**。「よ、ぞ、ね、な、や」などがあります。「会議に出席してくれるよね。」ということで、念押しの意味を加えています。

6. **呼びかけの意味**。「や、と」などです。「百恵や、近くに来ておくれ。」という文では、「百恵、」を「百恵や、」とすることで、呼びかける意味を加えています。

7. **強調の意味**。「とも、ぞ、ぜ、よ」などがあります。「武器を手に入れて魔物を倒すぞ。」という文では、「倒す」を「倒すぞ」とすることで、強調の意味を加えています。

8. **軽い断定の意味**。「さ、の、わ」などです。「大丈夫。明日があるさ。」という文では、「明日がある」を「明日があるさ」とすることで、軽い断定の意味を加えています。

終助詞の覚え方

日本語の終助詞の覚え方には、一般的に次のようなものがあります。

「さ・か・な・の・とも・よ・な・わ・ね（ねえ）・ぞ・や」

「魚の友よ・・・縄ねーぞや」

接続詞と接続助詞の違い

接続詞は単独で文節（それだけで意味を持つ単位）になれますが、接続助詞は単独で文節になれないという違いがあります。

- 暑かった**ので**汗をかいた。（接続助詞）
- 暑かった。だから汗をかいた。（接続詞）

文節に区切ってみると、以下のようになります。

- 暑かった**ので**/汗を/**かいた**。

- 暑かった。/だから/汗を/かいた。

このように「ので」は「暑かったので」で1つの文節になっていますが、「だから」は単独で文節になっています。

- 接続詞：単独で文節になる。
- 接続助詞：単独で文節にできない。

助詞と助動詞の違い

助詞と助動詞は、名前が似ていることや、両方とも述語の位置につくことがあるため、混同することがあります。助詞は言葉と言葉をつなげて意味をつくるものですが、助動詞は、おおまかに言えば動詞につながって、1つの述語をつくる言葉です。

- [助詞] 私**が**言った。 → 「私が」で主語の意味。
- [助動詞] 言**います** → 「言います」で述語。

しかし、混乱しやすいのは次のような文章です。

「シュートを打たれるな」

この文は、助動詞「れる」で受け身の意味が加わり、助詞「な」で禁止の意味が加わっています。助詞も助動詞も述語を作る言葉になっているのです。

文法用語では、使役は「ヴォイス」、「な」などの意味付けは「ムード」として分類されます。

助詞がムードを作ることはありますが、ヴォイスを作ることはありません。

このような場合、活用があるか無いかで、助詞と助動詞の違いを簡単に見分けることができます。助詞は活用がなく、助動詞は活用があります。

助詞と助動詞の見分け方・違い

- 助詞：活用がない
- 助動詞：活用がある

まぎらわしい助詞

最後に、見分けるのがまぎらわしい助詞「が」「と」について解説します。「が」も「と」も一語の助詞ですがいくつもの用法があるので、以下にまとめます。

助詞「が」の用法

助詞「が」には、(1) 主格をあらわす格助詞、(2) 逆説を示す接続助詞、(3) 単純接続を示す接続助詞という3つの用法があります。

(1) 主語を示す格助詞

電子レンジが壊れた。

(2) 逆説を示す接続助詞

精一杯努力したが、失敗した。

(3) 単純接続を示す接続助詞

その件ですが、本当ですか。

助詞「と」の用法

助詞「と」には、(1) 順接の接続助詞、(2) 逆説の接続助詞、(3) ともにの意味の格助詞、(4) 引用の格助詞という4つの意味があります。

(1) 順接の接続助詞

冷凍のまま炒めると、固くなる。

(2) 逆説の接続助詞

どうあがこうと、勝ち目はない。

(3) 格助詞「ともに」の意味

夫と旅行に行く。

(4) 引用の格助詞

石鹸がなくなったから買ってきてと妻が言った。

さらに詳しく

日本語は書き手の心情を表す言葉が発達していて、とくに助詞・助動詞にその特徴が顕著に現れると言われています。助詞・助動詞の種類は非常に多岐にわたり、心情にあった助詞・助動詞の使用によって、奥深い表現ができます。より深く助詞・助動詞を知りたい場合は、以下の書籍がおすすめです。



助詞・助動詞の辞典

作者：森田良行

出版社：東京堂出版

発売日：2007/9/1

[amazon で購入する](#)

本解説は、文部科学省（平成 29 年度告示）中学校学習指導要領に準拠した中学校国語教科書をはじめとする国語文法をわかりやすい観点で解説することを目的に作成されております。参考文献の詳細はページ末尾をご覧ください。

pro writers 編集部

<https://prowriters.jp/services/company>

日本語文法の基礎を分かりやすく丁寧に解説します。文法に関する知識は文章力や読解力の入り口です。専門書の内容をもとに、これだけは知っておきたい国語のベーシックな知識を集め、より理解しやすい言葉でご紹介します。多くの方に読まれ続けているこの『日本語文法』をレベルアップや文法の振り返りにお役立てください。

日本語文法の品詞一覧

基本

- [文法まとめ](#)
- [ことばの単位](#)
- [文の構造](#)

構造

- [主語](#)
- [述語](#)
- [修飾語](#)
- [接続語](#)

- [独立語](#)

品詞

- [名詞](#)
- [動詞](#)
- [形容詞](#)
- [形容動詞](#)
- [助詞](#)
- [助動詞](#)
- [副詞](#)
- [連体詞](#)
- [接続詞](#)
- [感動詞](#)

敬語

- [敬語まとめ](#)
- [尊敬語](#)
- [謙讓語](#)
- [丁寧語](#)

表現

- [受け身](#)

参考文献

- 『[国語 1](#)』『[国語 2](#)』『[国語 3](#)』 光村図書（中学校国語教科書）
- 『[中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説](#)』 文部科学省

- 『[国語教師が知っておきたい日本語文法](#)』 山田敏弘 くろしお出版
- 『[初級を教える人のための日本語文法ハンドブック](#)』 [監修] 松岡弘 [著] 庵功雄
高梨信乃 中西久実子 山田敏弘 [出版] スリーエーネットワーク
- 『[中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック](#)』 [監修] 白川博之 [著] 庵功雄
高梨信乃 中西久実子 山田敏弘 [出版] スリーエーネットワーク
- 『[助詞・助動詞の辞典](#)』 森田良行 東京堂出版
- 『[日本人のための日本語文法入門](#)』 原沢伊都夫 講談社現代新書
- 『[基礎日本語文法 一改訂版一](#)』 益岡隆志 田窪行則 くろしお出版